

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
席 主
研究員



ない。

本来この界限は、1950年代にはじまる栄華期を彷彿とさせる可能性を十二分に秘めているはずである。

それでは、その賑わいの再生が進まない要因を探りたい。根本的原因は、朝夕の歩行者量にみられるように、人の移動という主力導線上にありながら、彼らをそこに滞留・回遊させる仕組みにまち自体が構成されていないところにある。

自体が構成されていない、とはどういうことだろうか。その一つの原因は、さかのばれば、60年代後半にはじまる丸善百貨店・丸光さごう・ダイエー長野店という大型商業施設の移転・廃店に帰結する。

その後、丸善百貨店跡地は、当時の第一勧業銀行に、丸光さごう跡地は現在のSBC社屋・トイゴウエストに、そしてダイエー長野店跡地は、もんぜんぶら座に継承された。

当時にあつては、諸々のやんごとなき事情と、自由経済の最たる力関係によって、それぞれの場所が占有されたものと推計されるが、今となつてはこれが本来の新田町交差点界限の賑わい喪失の決定的要因となり、中心商業地再興の足枷となっている。

清水 秀幸氏（しみず・ひでゆき）1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長

14 新田町交差点周辺を考える

現在、長野市が推進する都市計画上の新田町交差点界限の地位は、改正都市再生特別措置法第81条立地適正化計画に定める「都市機能誘導区域」にあたる。

都市機能誘導区域とは、まちの活力の維持・増進（都市の再生）、そして持続可能な都市構造への再構築の実現を前提に、商業施設はもとより、医療・福祉も含めた都市機能増進施設の立地を誘導しようとする区域である。

しかし残念なことに、現状の新田町交差点界限は、人が歩き、クルマが行き交うだけの、どこにでもある交差点とその周辺の殺伐とした無機質な風景と化している。トイゴウエスト前の広場の朝市やイベント、フェスタも一過性の感を拭え

毎朝、長野駅から吐き出される約2万人近い人の波の約3割は、この界限を通過し、官庁街に、またオフィス街に吸い込まれ、夕方にはそれ以上の人の波が復路としてこの界限を利用する。

そして、界限300m四方の屋間の人口は、約1万人超を数える。それだけに、人をそこに滞留させ、回遊させるための再生手段、すなわち仕掛けづくりを投じることで栄華期の再興は図れるはずだ。

ならば、人々を滞留・回遊させる仕組みに街